

平成 27 年 1 月 10 日 (土)

へいあんきょうあと ひがしほんがんにじまえこぼぐん
平安京跡・東本願寺前古墓群現地説明会資料

調査場所 京都市下京区烏丸通七条下る東塩小路町702番2他
 調査期間 平成26年5月21日～平成27年1月中旬(予定)

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
 〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3
 URL <http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

1. はじめに

今回の調査地は京都府七条警察署の跡地にあたり、運転免許更新センター及び地域防犯ステーション等整備事業に伴い京都府総務部府有資産活用課の依頼を受けて発掘調査を実施しました。調査地は、平安京跡左京八条三坊九町の中央部にあたります。周辺においては、南に隣接する発掘調査地では平安時代の苑池が見つかっています。また、平安時代後期から室町時代にかけては、七条町(七条新町辺りを中心)に広がった職人町、八条院町(平安時代後期頃に現在の京都駅周辺にあった八条院障子の邸宅を中心)に形成された職人町が形成され、商工業の中心地として栄えました。また、室町時代には東本願寺前古墓群が形成されました。

2. 調査の概要

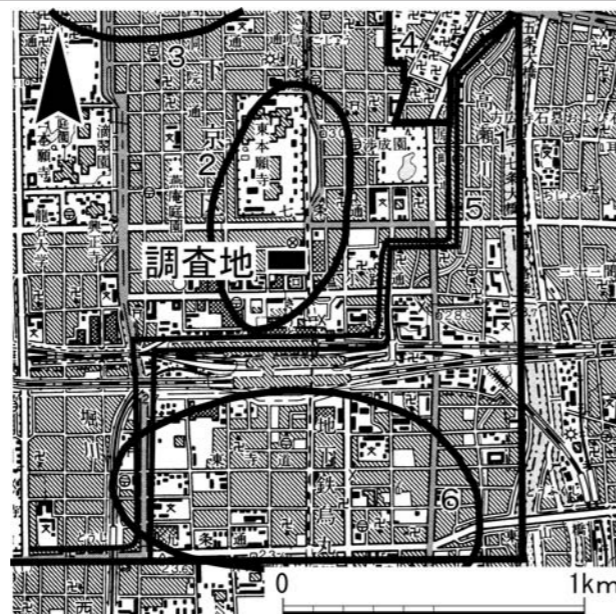
今回の調査では、大きく鎌倉時代後半から室町時代、平安時代から鎌倉時代中葉の2時期の遺構を確認しました。

①鎌倉時代後半～室町時代

調査区全域にわたって柱穴、溝、土坑、埋甕遺構などを検出しました。

柱穴 直径0.25～0.65m、深さ0.1～0.5mで、建物を支える柱を据えたものです。調査区全体で多数の柱穴を確認しましたが、他の遺構による削平を受けており、建物に復原できる柱並びは確認できていません。

溝 調査区の中央部分で2条検出しました。溝S D238は東西に伸びる溝の西端で北側に屈



第1図 調査地位置図及び主要遺跡

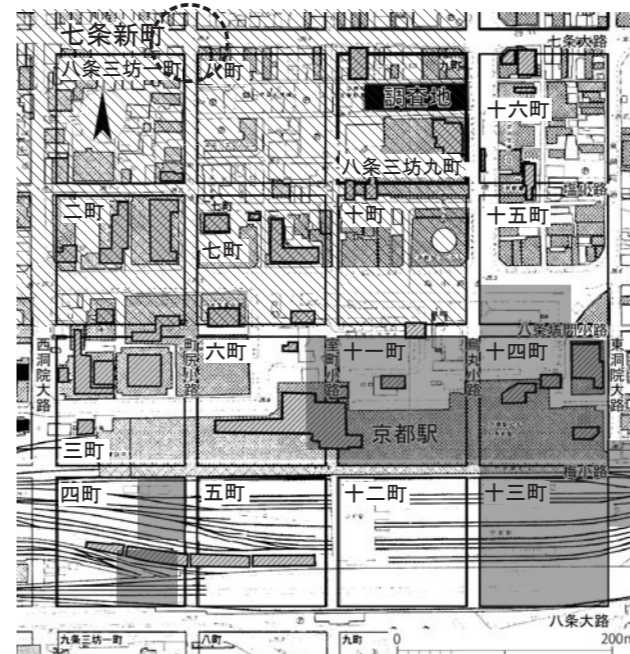
(国土地理院 1/25,000 「京都東南部」)

1. 平安京跡
2. 東本願寺前古墓群
3. 烏丸綾小路遺跡
4. 寺町旧城
5. 御土居
6. 烏丸町遺跡

曲するL字形の溝です。幅0.9m、検出長17.5m、深さ0.4mを測ります。溝S D275は南北方向に掘削された溝で、幅0.4m、検出長8.5m、深さ0.1mです。これらの溝は東西・南北方向に掘られていることから、宅地を区画する溝と考えます。

井戸 調査地の西半の北辺で2基の井戸を検出しました。井戸S E20は曲げ物が遺存しており、井戸S E847は縦板横棧留めの井戸です。ともに室町時代のもので、

土坑 大小180基以上の土坑を検出しました。これらの土坑のうち、70基以上の土坑から、多量の土師器皿が出土しました。土師器皿が集積した土坑は調査地の全域に分布していました。大多数のものが一辺1～1.5m、深さ0.05～0.4mの規模で、平面形は方形～隅丸方形や円形



第2図 平安京跡左京八条三坊における調査

- 1313年東寺に寄進された時点の八条院町
- ▨ 平安末～鎌倉時代の七条町 『京都の歴史』第2巻

～楕円形をしています。土坑S K126は平面形が円形で、径0.95m、深さ0.36mを測ります。一方、平面が整った長方形の土坑が約10基みられます。土坑S K287は長辺1.8m、短辺1.0m、深さ0.2mを測ります。

これらの土坑から出土する大量の土師器皿は細かな破片となっており、埋土の上から下まで隙間なく埋まっていた。底面近くでは、ほぼ完形の土師器皿数枚～数十枚が口縁部を上・下に向けて、置かれた状態で出土しました。土師器皿のほか、土師器鍋・鉢、瓦質土器鍋・壺、輸入陶磁器などの破片も少量出土しましたが、完形に近いものはありませんでした。土器以外に、炭化物・灰・焼けた骨片・鉄釘・銭などが出土しました。特殊な遺物として、土坑S K626から鞘入りの小刀が出土しました。出土遺物や切り合い関係から、建物跡と同時に造られていることがわかりました。

埋甕遺構 調査地の南西部で埋甕S K230を検出しました。常滑焼大甕の底部を打ち欠き、横位に置かされた状態で埋められていました。口縁部は瓦で塞いでいます。土師器皿が甕の外に置かれていたようで、土師器皿数枚が流入土とともに内部に落ち込んでいました。

出土遺物 上述のものほか、土坑や包含層からは、取鍋、油煙を集めて墨を作る容器であ

る土師器丸底壺、砥石未成品・石鋸、鍛冶滓・銅滴・金箔などが出土したことから、周辺に铸造や鍛冶、金細工などに携わった工房が存在したものと推測されます。

②平安～鎌倉時代中葉

地山の上に黄褐色粘質土で整地がなされているのを確認しました。整地土に含まれる土器から、鎌倉時代前半～中葉にかけて整地されたと推定されます。今回の調査地では、平安時代から鎌倉時代中葉以前の遺物は出土しましたが、遺構は北西部で平安時代の土坑1基を検出しただけです。

3. まとめ

今回の調査では、鎌倉時代後半から室町時代の遺構を検出し、铸造や鍛冶、金細工などに関連する遺物が出土しました。これらは七条町・八条院町の周辺に住まう職人たちの生活に伴うものと考えられます。

区画溝を検出したので、左京八条三坊九町は小区画に分割されていたことがわかります。柱穴を調査区の全面で検出したことから、小区画に分割された土地毎に、小規模な建物が建てられていたと考えられます。

建物と同時期に掘られたと推測される土坑を180基以上検出し、約70基の土坑で多量の土師器が埋められていました。比較的小さな土坑に土師器皿が大量に充填されている点や、底面近くに完形のものが置かれた状態で出土している点は、ゴミなどを捨てた廃棄土坑とは考えられない状況です。何らかの儀礼に伴って造られたと推測されます。一部の土坑からは骨片・鉄釘・貨銭が出土しているため、これらの土坑の一部は宅地内に作られた墓である可能性があります。

およそ150年間にわたって、宅地や工房の中には小規模な建物が造られ、空き地には土師器を大量に埋めた土坑などが掘られました。以上のように、七条町・八条院町を中心に铸造や鍛冶、金細工などの手工業生産に携わった職人たちの生活の一端を窺い知る資料が得られました。



写真1 井戸S E 20井戸杵(曲物)検出状況(北より)



写真2 土坑S K 126検出状況(南より)

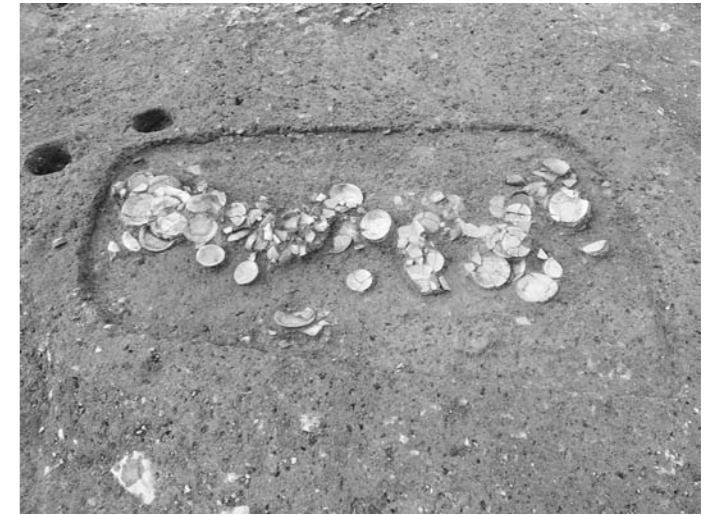


写真3 土坑S K 287検出状況(南より)

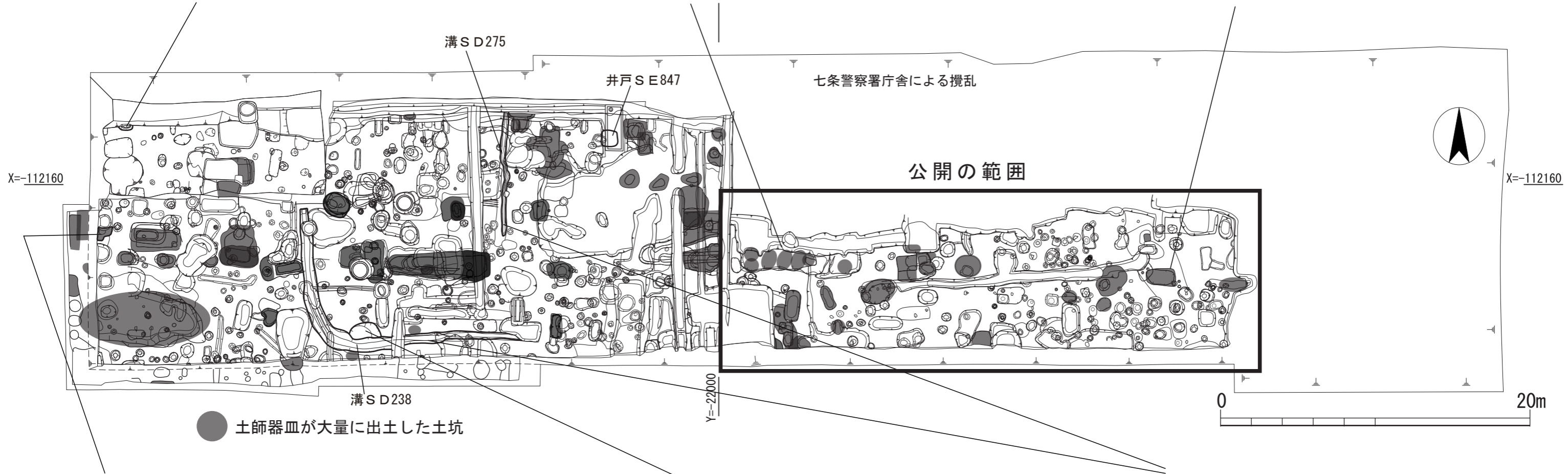


写真4 土坑S K 626小刀検出状況(西より)



写真5 埋甕S K 230検出状況(北より)



写真6 溝S D 238・275検出状況(西より)